

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32636

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25750300

研究課題名(和文)戦前期日本の女子体育関連イメージに関する歴史的研究

研究課題名(英文)Representations and Images of Women's Physical Education in prewar Japan

研究代表者

春日 芳美(春日芳美)(Kasuga, Yoshimi)

大東文化大学・スポーツ健康科学部・講師

研究者番号：20645303

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、第二次世界大戦以前の日本における女子体育に着目し、これまでの研究で語られてきた「女子体育関連イメージ」の見直しを図ることである。研究の結果、(1)女子体育と「おてんば」という言葉の関連、(2)女性体操教員と女性スポーツ選手をめぐる言説とイメージの違い、(3)女子体育指導者間の人間関係と体操の系譜、(4)第二次世界大戦以前の日本とヨーロッパにおける女子体育の共通点、が明らかになった。

研究成果の概要(英文):The purpose of this research was to focus on women's physical education in Japan before World War II and to review the "image related to women's physical education" which had been discussed in previous studies. As a result of the research such things as (1) the relationship between women's physical education and the word "otenba" (tomboy), (2) the differences in statements and images about female physical education teachers and female athletes, (3) human relations among female physical education instructors and the genealogy of physical exercises and (4) common points in women's physical education in Japan and Europe before World War II have been revealed.

研究分野：女子体育史

キーワード：日本女子体育史 女性体操教員 女子スポーツ 女性観

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、筆者が日本女子体育史を対象として研究を行う中で、「日本では女子体育の普及が旧来の女性観によって困難であった」ということが繰り返し語られている点に疑問をもったことがある。確かに、女子体育(や体育全般)に対しては新聞や雑誌において批判的な意見が散見されるが、決してそのような意見ばかりではなく、有識者を中心に体育による健康へのよい影響や体操の重要性を説く論説も数多くみられる。また、大正期には女子スポーツ選手の活躍も新聞記事等で取り上げられるようになり、そこでもまた女子スポーツ選手の存在は好意的に伝えられている。先行研究から、女性の身体運動への批判的な見解があったことは事実であると考えられるが、そればかりではなかったのではないかと、という考えに至ったことから本研究に着手した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は大きく以下の2点である。

(1) 世界大戦以前の日本における女子体育に着目し、「女性体操教員の社会的地位は低かった」、「女子体育は旧来の女性観と対立したため普及が困難であった」というような女子体育関連言説にみられる「女子体育関連イメージ」の見直しを図ること。

(2) (1)と同時期の日本における女子体育の展開について、ヨーロッパやアメリカと比較した場合のような共通点、相違点が見いだせるのかを明らかにし、これまで日本国内を対象として行われてきた女子体育史研究を世界的な女子体育史の一部として位置づけること。

### 3. 研究の方法

前述した研究目的を達成するために、まず戦前期日本における女子体育の事例研究(女性体操教員及び女性スポーツ選手のイメージ比較、女子体育における「体操の系譜」の検討)を行った。また、そこから得られた成果をもとに、日本における女子体育の普及過程と国外(ヨーロッパやアメリカ)における女子体育普及過程の時代的背景や担い手等の比較を行い、世界的な女子体育史の一部として日本の事例を位置づけていく作業を行うこととした。

これらの課題を遂行する上で、具体的に以下のような方法を用いた。

(1) まず、「女子体育とお転婆」についての検討を行った。明治期から大正期にかけて、女子体育がどのようなものであるかを表現する言葉として「御転婆」を用いた言説が非常に多くみられる。現在の意味として受け取れば「活発で女性らしさを欠く」という程度に読み取れるものであるが、実際には「御転

婆」はより強い意味をもった言葉であったと考えられる。先行研究によれば「御転婆」は旧来の固定観念的規範から逸脱する事柄を取り立てて表現する言葉であるということであるが、その意味としては「慎みがない、軽はずみ、はすっぱ」等と気質や言動に対して「本来の女性があるべき姿から劣る」と見なされる悪いイメージを強く打ち出す傾向があった。そのように考えると、女子体育をすることが「御転婆」であると表現されたことは、女子体育が単に女性らしさを欠くものであるというだけではなく、女性の規範と対立しあるべき姿から劣った存在として女性を形成するものとしてイメージが構築されていった可能性が考えられた。そこで、女子体育を表象する用語としての「御転婆」に着目し、「御転婆」という用語が用いられた女子体育関連言説における女子体育への評価がどのようなものであったのか分析した。

(2) 前述の課題を発展させて行ったのが「女性体操教員と女性スポーツ選手のイメージ対比」である。これまでの研究成果から、女性体操教員は女性教員全体と比較して社会的評価が低い傾向にあったことが明らかになっている。そこで得られた結果は、高学歴で出身階層も比較的高かった女性体操教員の社会的評価が低いものとして考えられた要因として、体育の学問的評価の低さとそれに伴う女性体操教員の学校内(職場内)における相対的な地位の低さ、そして女性が身体運動を行うことに対する偏見があったというものであった。その一方で、大正期に拡大した女子競技の選手に対しては、女学生向けの雑誌で特集が組まれる等肯定的な評価が多くあったことが確認できた。同様に運動(体育・スポーツ)に関わる者でありながら、女性体操教員と女性スポーツ選手に対する評価が全く違ったものであったのは、一体なぜなのか。この要因を明らかにするために、まず雑誌や新聞の記事を中心に「女子体育」と「女子競技(スポーツ)」それぞれに対してどのような記述がなされているのかを分析した。そしてそこから得られた結果と、女性体操教員及び女性選手に対するイメージを記述した史料の検討からなぜ女性体操教員と女性選手の評価が対照的なものとなったのかを検討した。

(3) 女子体育における「体操の系譜」について検討し、これまで見落とされてきた女子体育普及過程において「男性体育家」が果たした役割を検討した。体操の系譜に関連する体育の世界における権力構造について清水(1996)は、東京高等師範学校における永井道明と嘉納治五郎の対立という視点から考察を行った。この対立はスウェーデン体操と普通体操の対立としても捉えられているが、女子体育指導者であった二階堂トクヨ(スウェーデン体操)や藤村トヨ(普通体操)はダ

ンスを中心とする第三の系譜として示される。女子体育が時代とともに行進遊戯(のちのダンス)を中心としてその教材研究の範囲を狭めてゆくのは事実であるが、指導者の体操の系譜としてみる際には二階堂はスウェーデン体操、藤村は普通体操の系譜に位置づけられるものであると考えた。この二人は、それぞれの系譜の中で重要な役割を果たしており、彼女たちを「男子体育」指導者と同様の系譜の中に位置づけることによって、女子体育指導者をダンスの系譜として一括りにしてしまえばみえないものを明らかにしようとした。

(4) (1)~(3)で明らかになった第二次世界大戦以前の日本における女子体育の展開について整理し、日本の女子体育普及過程や女性体育指導者の置かれた状況、女子体育関連イメージなどが同時期におけるヨーロッパやアメリカのものと比較してどのような共通点、相違点が見いだせるのかを検討した。

#### 4. 研究成果

現在までに得られた成果は、以下の通りである。

(1)「女性体操教員は御転婆」である、という言葉について、当時の雑誌や書籍から複数の記述がみられたものの、「御転婆」という言葉がもつ当時の正確な意味を抽出することは難しかった。しかし、当時の女子体育指導者を中心として、女子の体操が女性らしさを欠くことにより多くの人から批判的に捉えられていたという点が共通認識としてあり、「女性らしい体操」はそれぞれの指導者が重視していた。多くの指導者は、「日本人の身体改善」を体操の重要な目的のひとつと位置づけており、身体改善の手段として女子体育を普及させるためには「女性らしさ」と対立しないことが重要であった。

女子の体操が批判される一方で大正期には高等女学校を中心に女性スポーツが普及し始め、選手も注目された。日本の女性スポーツ選手のパイオニアである人見絹枝も、「女性らしさ」の問題から多くの批判を受けたことを自身の著書で明らかにしている。

(2)女性体操教員と女性スポーツ選手をめぐる言説の検討を行う中で、女性体操教員よりも女性スポーツ選手の方がよりメディアに注目されており(量的により多くの記事がみられた)より好意的に報道されていることが明らかになった。浜田(2017)が明らかにしているが、1926年・1930年に行われた世界女子オリンピックに関する報道では、新聞各社は女性選手達を「新時代の女性」として好意的に報道している。これは、新聞社が中心となってスポーツ大会を運営し、女子スポーツがメディアイベントとして重要な報道対象となっていたことも影響していると考

えられるが、新聞読者に対して一定の影響をもっていたと考えられる。

しかし一方で、(1)でも触れたように報道以外の場面で女性スポーツ選手が「女性らしさ」の問題から批判されることはあり、女性の体育・スポーツに対する意識は簡単には変わらなかったと考えられる。

メディアは女子スポーツを好意的に報道したが、女子体育指導者にはスポーツにおける「競争」を良くないものとして批判する者もみられた。女子スポーツは、運動することが女性らしさと対立すると考えられた点のみではなく、当初「競争」という点でも批判的に捉えられていたが、世界的な活躍をする女子選手の登場によって論調に変化がみられた。彼女たちは「女性」であることよりも「日本人」であることが注目され、体格で劣る外国人と対等に渡り合うことで女子スポーツに対するイメージに変化をもたらしたと考えられる。

(3)二階堂トクヨ、藤村トヨを中心として日本の体育指導者間の人間関係がどのようなものであったのか検討した。彼女たちがどのような体育理論を支持しているのかという点だけではなく、個人間・組織間での不仲等があり、単純に体育思想のみで人間関係を図式化することは困難であった。一方で、戦前期の日本において内容が同じ体操が異なる名称で行われたり、同じ名称の体操の内容が異なっていたりといった混乱が起こった背景にはこの体育指導者達の間関係に因があることが示唆された。

(4)国際学会等での意見交換を通して、日本の女子体育とヨーロッパやアメリカの女子体育の状況にはかなりの共通点が見出せることが分かったが、学会発表等具体的な成果をまとめるには至らなかった。今後の継続課題としたい。

#### <引用文献>

清水諭(1996)体操する身体：誰がモデルとなる身体を作ったのか/永井道明と嘉納治五郎の身体の格闘、年報筑波社会学 8, 119-150.

浜田幸絵(2017)女のスポーツをめぐる語り：世界女子オリンピック(1926年、1930年)報道の分析、島大言語文化 42, 67-88.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 3 件)

Yoshimi KASUGA「Women's Physical Education in Japan: Normal Exercises, Swedish Gymnastics, and Dance」International Society for the History of Physical Education and Sport, 2015年

8月20日、(クロアチア、スプリット)

Yoshimi KASUGA 「Representations and images of female gymnastics teacher and female athlete in Japan (1900-1930): Focusing on the relation between women's physical education and sport」International Society for the History of Physical Education and Sport, 2014年9月23日、カタール大学(カタール、ドーハ)

Yoshimi KASUGA 「Social Valuation of the Female Gymnastics Teacher in Japan during the Latter Meiji Period」International Society for the History of Physical Education and Sport, 2013年8月20日、台湾師範大学(台湾、台北市)

〔図書〕(計 1 件)

春日芳美「日本の女子中等教育における「体操科」の展開と「女子体育論」の諸相」早稲田大学出版部、2013

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

春日 芳美 (Yoshimi KASUGA) 大東文化大学・スポーツ・健康科学部スポーツ科学科・講師

研究者番号：20645303